

# 風と共に去りぬ

## 映画文学人生論

Margaret Mitchell *Gone with the Wind* (1936)

邦訳：鴻巣友季子訳『風と共に去りぬ』(2115)

映画：1939年公開

監督：ヴィクター・フレミング

出演：スカーレット・オハラ ヴィヴィアン・リー

レット・バトラー クラーク・ゲイブル

リンカーン大統領が男たちを、兵士を召集したそうです。義勇兵ということですが、

『風と共に去りぬ』の発端は西暦一八六一年。日本では文久元年だ。二年前の安政五年、日米修好通商条約が締結され、翌万延元年には新見正興を正使とする遣米使節が派遣されている。

泰平の眠りを覚まされた日本は、鎖国をやめ、文明開化への道を歩みはじめだが、あいにく条約相手国である米国は好戦的な国家で、特に南部や西部は文明化されていたとはとてもいえない。この年、南部諸州が連邦国家に対する独立宣言をして、いわゆる南北戦争が勃発している。

「リンカーン大統領が男たちを、兵士を召集したそうです。義勇兵ということですが、その数、七万五千人にのぼるとか！」という情報をもたらしたチャールズ・ハミルトンは、自らも義勇兵になるという意志をスカーレット・オハラに伝え、

「待っていてくれますか？」と聞いた。

「待つなんていやです」と、スカーレットは言った。チャールズが好きだったからではない。最愛のアシュレイ・ウィルクスが、チャールズの妹のメラニーとの婚約を発表したので、その腹いせにチャールズと結婚することにしたのである。

チャールズは従軍中に病死し、スカーレットは未亡人となる。彼女にまわりつき、ちやほやしてくれた若者たちも次々と戦死し、西暦一八六五年に南軍は降伏する。

# 風と共に去りぬ

映画文学人生論



当時の日本は元治二年。前年には米英仏蘭四国艦隊による下関砲撃事件があった。攘夷をとнаえて外国商船を砲撃した長州藩への報復である。

たまたま米国の北軍に所属する艦船ワイオミング号が南軍のアラバマ号を追跡して、横浜に寄港していた。このワイオミング号一隻によって長州藩の庚申丸と壬戌丸が撃沈され、癸亥丸は大破して、長州海軍は壊滅状態に追い込まれた。

日米海軍の戦力差はあきらかまで、以後日本人のトラウマとなったが、南北戦争でも南軍の海軍力は劣勢で、北軍に対して勝ち目はなかった。

南部諸州の経済は主として大規模農場（プランテーション）で黒人奴隷の手作業により生産した綿花など農産物の輸出に依存していたが、優勢な北軍に海上封鎖され、欧州との貿易が困難になった。英国が南部の味方をして参戦するだろうという淡い期待は裏切られた。

五年間続いた戦争が南軍の降伏によって終わると、大量の武器弾薬が余剰になった。その一部は死の商人たちを通じて薩摩や長州に輸出され、戊辰戦争や西南戦争で消化されることになった。

戦争で勝利の決め手になるのは愛国心や精神力ではない。艦船や武器弾薬など物資の生産力だということ南北戦争は証明した。同じパターンで決着がついたのは七十五年後の日米戦争である。

われは多くをうち忘れ、シナラよ、風とさすらひて、世の人の群にまじはり狂ほしく薔薇をなげぬ、薔薇をば。アーネスト・ダウスン